赤枝香奈子（著）

『近代日本における女同士の親密な関係』（角川学芸出版、2011年）

近代日本形成期における「ロマンティック・ラブ」の受容過程を問う

——「同性愛の女性化」と「愛情の女性化」の関係

杉浦郁子

はじめに

本書の主題は、タイトルのとおり、戦前における女同士の親密な関係である。このタイトルから、「レズビアン」に関する「セクシュアリティ」研究だと思った人は多いだろう。たとえば、19世紀後半アメリカ中産階級が謳歌した女同士の親密な関係を「レズビアンの歴史」に連なるものとしてとらえたリリアン・フェダマン（Faderman 1991=1996）の読者ならそう考えると思う。私もそう思った。

しかし、本書は日本の近代化にともなう親密性の変容を扱った研究である。この書評では、本書が「レズビアニズム」や「（ホモ）セクシュアリティ」と結びつきやすい「女同士の関係」という題材を「親密性の変容」という視点から分析したことを評価し、「親密性」研究としての側面にしぼって解説していきたい。

1 本書の概要——「親密性」研究としての

本書は、これまで個別に論じられてきた「女の友情や愛情、女学生同士の親密な関係、〈同性愛〉という現象あるいは問題群」（p.181）を、「女同士の親密な関係」として総体的にとらえたうえで、その歴史的展開をたどるものである。著者の赤枝香奈子は、明治末から戦前昭和初期の、近代日本形成期の史資料を検討することで、女同士の親密な関係が当時、どのように論じられ、実践されたかをつまびらかにする。本書の歴史記述を通して明らかにされるのは、その主要な担い手であった女学生たちが行っていたのは「ロマンティック・ラブ」だった、ということであり、日本にロマンティック・ラブの理念がどのように根づいていったのか、という受容過程の一端である。

「ロマンティック・ラブ」とは、現代を生きる私たち（とくに女性たち）が「恋愛」と見なすような親密性のことである。それは西欧で出現、近代に普及し、日本には明治期半ばに入ってきた。それが広く実践されるようになるのは戦後、高度経済成長期とされており▶1、伝来から普及までにかなりの時間を要している。その間、この概念がどのように受け容れられていったのかは不明な点が多いという。その一因は研究対象を男女の親密な関係に限定してきたことにある、と赤枝は見定め（p.15）、対象を女同士の関係に拡大した。そうして、ロマンティック・ラブが1900年代に急増した女学生を魅了し、女学校という空間で追求され、女同士の関係のなかで実現されてきたことを見出すのである。

「ロマンティック・ラブとは何か」については、研究者によって見解の相違がある。たとえばイギリスの社会学者、アンソニー・ギデンズ（Giddens, Anthony）は、ロマンティック・ラブを「結婚」という制度に結びつくものとして把握しているが、赤枝が重視するのはその形態より理念的側面である。その理念とは「相手との間に永続性のある感情的きずなを、その感情的きずなそのものが本来もつ特質を基盤に確立できる」（Giddens 1992=1995: 12）こと、換言すれば、「自由で平等な永続的関係を、他からのいかなる強制によるのでもなく、自らの主体性によって、つまり自らの相手への想いだけを根拠として築くこと」（p.32）ができる、との想定である。

「おめ」「オデヤ」「同性の恋」「エス」などと呼ばれて明治半ば頃から女学

校で広まった女同士の親密な関係は、結婚がゴールとなり得ない関係であったものの、「単なる友情」と切り捨てられないような関係であった。それは、近代の「新しい女」が主体的に、一対の永続的なつながりを求めた関係、まさにロマンティック・ラブの理念が体現された関係である。本書ではこのことが例証されていく。

2 「女学生同士の親密な関係」の出現をめぐる問い

さらに本書は、ロマンティック・ラブの理念を表現するような女同士の親密な関係が「戦前の女学校において広く見られたのはなぜ、どのようにしてか」という問いにも一定の回答を与えている。

女性を家庭の担い手とする性分業観にもとづいて公／私の領域が編成されていった明治期、性科学やそれを下敷きにした通俗性欲学が流行し「同性愛」が「変態」化されていった大正期において、その経緯はどうしても入り組んでくる。そのため本書の議論も込み入っており、そうした議論の細部にこそ面白みを感じる読者もいると思われるが、ここでは少し乱暴に切り詰めて、この問いに対する回答を紹介しよう。主に第4章、第5章、第6章で論じられる内容である。

2-1 「女同士の親密な関係」の性科学的解釈と「同性愛の女性化」

第4章では、1910年代に影響力をもち始めた性科学言説が、女同士の親密な関係をどのように認識したのかを明らかにしている。

1911年7月、女学校卒業生ふたりによる心中事件が起こり、若い女同士の関係性が世間の耳目を引いた。この事件は、女同士の親密な関係が性科学の知によって解釈されるきっかけをつくった。事件は「恐るべき同性の愛」と報じられ、「同性の愛」が転じて「同性愛」となったが、この「同性愛」は現在と同じような関係を指し示す概念ではなかった、と赤枝は指摘する。1920年代の通俗性欲学者たちは、homosexualityという西洋伝来の概念を「当時女学校で見られた親密な関係や女性同士の心中と結びつけ」(p.107)、「日本的に」解釈したうえで触れ歩いたため、「同性愛」概念の「女性化」(p.107)と呼べるような事態が戦前には存在していたという。

続けて赤枝は、「女性の同性愛には2種類ある」という認識が戦前に維持されていたことを、新聞や雑誌記事の性科学言説をたどりながら示していく。ひとつは「仮の同性愛」であり、もっぱら女学生同士が実践する一時的で比較的安全なもの、異性恋愛へ向かっていく段階的現象として位置づけられるものである。もうひとつは「真の同性愛」であり、こちらは男性化した女性による永続的で危険なもの、先天的で矯正不可能なものと考えられた。

以上を明らかにしたうえで、赤枝は次のようにまとめる。女性の同性愛言説が問題にしていたのは、そのセクシュアリティではなくジェンダーである、と(p.120)。

「仮の同性愛」を問題にする冗長な言説から漏れ出るのは、当時の中産階級の女性に向けられた「望ましい女性像」、女学生に対するある社会的・教育的関心である。すなわち、女学生たちは、いまは「未完成」であってもいずれ家庭の責任者としての役割を立派に果たせる女性となるべく「矯正」されなければならない、という関心(p.120)である。結局のところ、「仮の同性愛」への世間の注目は、「女とはどうあるべきか」というジェンダーの規範化と関連づけられる現象なのである。

他方「真の同性愛」もまた、その「性(欲)」(セクシュアリティ)的特徴において切り出されているわけではない。「異性化」というジェンダーをめぐる指標において弁別されているからである。「仮の同性愛」が注目を集めるなかで、男性化した女性は、「女」を超えた存在、女性がこなすべき妻・母親役割を果たせない存在、矯正不可能ゆえにもはや「女らしさ」を云々する必要のない存在として等閑視されたという(p.132)。

「仮の同性愛」も「真の同性愛」も、その女性たちがどのような「性」体験をしているのか、どんな「性」生活を送っているのか、ということとは無関係に分節されている。このような戦前の女性同性愛言説を「セクシュアリティの歴史」として分析することはできない、という赤枝の議論は、「セクシュアリティ」研究の盲点を示すものでもあるのだ。

2-2 「女学生同士の親密な関係」の受容と「愛情の女性化」

続く第5章と第6章では、性科学言説によって病理化された「仮の同性愛」の実践者と、それが実践される学校がそれぞれ異なる評価基準から、それを

「望ましいもの」として認知していたことが明らかにされる。

当の女学生たちは、性科学の描く「変態性欲」が自分たちの実践しているものと「あまりにかけ離れていた」(p.194) ためか、性科学的に見て「異常か正常か」ということにあまり頓着しなかったようである。それよりも「真の愛を実践しているか否か」にとらわれて自分や友人の関係をさかんに吟味したという (p.167)。

何をもって「真の愛」と見なすのか、という認識は時代を追って少しずつ変化するものの、女学生たちは、「お金」や「同情」という「世俗」、「野蛮」や「下層」を連想させる「肉欲」を忌避して、「美」や「繊細さ」「精神性」などと結びつけられたプラトニックな純愛を志向した。「「対等性」や「自主性」、すなわち「自由」や「平等」という近代的理念に基づく」(p.187) ような、人格的きずなの交流を好んだのである。

こうした関係が女学生の支持を集めたのは、それが「結婚」とは対極にあったからだった。当時の結婚は義務的なものであり、夫婦の関係は自由、対等でない。近代的自我に目覚めた「個」としての女性が理想とする関係が実現できたのは、血縁・地縁から切り離され、将来の結婚圧力から一時的に逃れられる女学校だけであった (p.188)。女学生たちは、女学生同士の親密な関係を「単なる友情」と見なす外の世界の基準を退け、「(恋) 愛」の一類型として遂行することを通して、女学校独自の人間関係をめぐる規範を作っていたのである。それはつまり、女学校の「文化」である。

他方、教育関係者は、女学生とは異なる価値観において、女学校のなかの親密な関係を容認していたという。学校側は、女学生同士の親密な関係によって「女らしさ」——近代家族という私的領域の担い手となるにふさわしいとされる資質、すなわち、他者への思いやりや協調性、家庭運営の責任を負えるだけの自主性 (p.190) ——が滋養される、というメリットを見ていたのだろう、というのが赤枝の分析である。折しも、「愛情の女性化」が推し進められた時期であった。女同士の親密な関係は、「他者との関係への自己投入、という女性に課せられたジェンダー規範から見て」(p.201) それほど悪くないものだとされ、女性が「愛情の持ち主」(p.205) として「成長」するためのステップとして受容されたのである。

ロマンティック・ラブの理念を実現しようとした女同士の親密な関係は、女性が愛情あふれる存在となるレッスンとして作用し、近代家族にフィットする女性を安定供給する、という役割を果たしたことになる。その経験は、女学校時代の関係性を豊かにしつつ、卒業後の社会関係を縛るような規範を確実に内面化させた、という逆説的な一面をもつものであった。

2-3 「問い」の意義をめぐって

以上のように、本書は「戦前の女学校において女同士の親密な関係がどんなものとして構築され、なぜ女学生によって広く実践され、教育関係者に許容されたのか」という問いに、極めて社会学的に答えている。「女同士の親密な関係」という主題に「親密性」という視点をもちこんだ赤枝の発想には刺激を受けたし、(少なくとも私にとっては) 意外な視点によって発見された歴史的事実——ロマンティック・ラブの日本的普及——も重要だと思う。

少し物足りないと思ったのは、「ロマンティック・ラブの受容過程」を問うことにどんな意味があるのか、についての議論である。赤枝は「日本における親密な関係の特殊性と普遍性や、女性が親密な関係を主体的に生きるということの意味を、現代でも深いところで規定し続けている重要な側面であると考えるから」(p.35) と述べるにとどまっているが、この問いの現代的な意義について掘り下げた議論を聞いてみたい。

また、言説のなかに垣間見える様々な社会的文脈——たとえばジェンダーや階層をめぐる社会構造、近代家族の形成、言説を語る人々の社会的位置など——に関して、もう少しくわしい説明があっても良かった。これらの文脈と「ロマンティック・ラブ」とのつながりがわかれば、本書での作業の意味がもっと飲み込みやすくなるのではないか。

3 おわりに

3-1 『青鞜』『番紅花』の新解釈も

別の側面からも本書が労作であることを強調しておこう。日本における男同士の親密な関係については、男色を中心とする研究蓄積があるが、女同士のそれはほとんどない。未踏の領域を開拓するために、赤枝によって多くの史資料が探り当てられたことは、後に続く研究者の手間をずいぶんと省くだ

ろう。また、この書評では端折ったが、本書で紹介される当時の小説は楽しめるし、言説の読み解きも緻密で、豊富な論点が示される。中には十分に展開されない論点もあるので、この主題に関心のある人なら研究の着想を得られそうだ。

くわしく紹介できなかった第2章、第3章では、初期の女性解放論者たちによる女同士の親密な関係やそれをめぐる議論を検討している。第2章では、日本で初めて女性たちの手で発行された雑誌「青鞜」(1911-1916)を再解釈し、平塚らいてうによる尾竹紅吉(一枝)の切り捨てが「青鞜」に対してもった意味――「新しい女」というカテゴリーの生成、およびその生成過程で排除された「女同士の恋愛によって女性解放を模索する」という方向性――を取り出している。続く第3章では、「青鞜」からはじき出された尾竹が発行した「番紅花」(1914)を、女性の連帯を模索する運動体として位置づけ、その性格を分析している。「青鞜」や「番紅花」で見られる先駆的思想の限界と可能性にふれたい人は、ぜひ本書にあたってほしい。

3-2 「男性的女性」言説の歴史記述に期待

赤枝は、すでに次の研究対象を「真の同性愛」とされた「男性的女性」に定めている。「女ではない存在」として無関心の領域に囲い込まれた「男性的女性」が当時の言説のなかでどのように消去されたり、顕在化したりしたのかが、次の課題である。私は、その研究発表を聞く機会を二度ほど得たが▶2、女性に「セクシュアリティの近代」があるとすれば、その水脈は「男性的女性」言説(「真の同性愛」言説)のほうにあるのではないか、という気がする。男性を性的欲望の主体に割り振る「セクシュアリティ」という知は、「疑似男性(異性化した女性)の欲望」については饒舌になるのではないか。また、「真の同性愛」言説をたどるということは、本書が扱わなかった階層や時代――女学生や女性解放論者などの知的階層が登場する以前――の言説を見いだし、1910年代の「女学生」言説へと接ぎ木する、という射程の長い作業も含まれてくるだろう。次の研究も史資料の蒐集からして骨が折れそうである。研究の進展を気長に、そして楽しみに待ちたい。

註

▶1――このことはよく、結婚の仕方の変化において示される。戦前には、見合い結婚が約7割を占めていたが、戦後は一貫して減少し、1965〜69年頃に恋愛結婚が見合い結婚を逆転、現在では見合い結婚は1割を下回っている(国立社会保障・人口問題研究所『出生動向基本調査』)。

▶2――一度目は「クィア学会第4回大会」(2011年11月13日、中央大学)であり、二度目は「社会構築主義の再構築プロジェクト研究会2011年度第3回研究会合」(2012年2月19日、大阪府立大学)である。

参考文献

Faderman, Lillian. 1991. *Odd girls and twilight lovers : a history of lesbian life in twentieth-century America*. New York : Columbia University Press. = 1996. 富岡明美・原美奈子(訳)『レスビアンの歴史』筑摩書房.

Giddens, Anthony. 1992. *The transformation of intimacy : sexuality, love and eroticism in modern societies*. Cambridge: Polity Press. = 1995. 松尾精文・松川昭子(訳)『親密性の変容――近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.